目次
大谷大学と社会 1
1989年度「指定研究」研究計画紹介 2
1988年度「指定研究」研究経過報告 4
1989年度「一般研究」研究目的紹介 9
1988年度「一般研究」研究概要 13
近代大谷派教団史に於ける占部観順異安心事件の位置について 18

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 22 1989. 7. 20.

大谷大学と社会

——「大学開放と生涯教育の研究」発足に向けて——

本学学長 寺川俊昭
(教授・真宗学)

大谷大学はその大学としての出発点のところに、独自の志願をもっている。それは大乗仏教がその修道と思索において磨いてきた、人間にとって真実であるものへの止むことのない探求と、透徹した人間理解に問いかけながら、自らの研究を行いまた人間形成を行っていきたいという志願である。一言でそれをいえば、大学において研究し学ぶ主体である自己について、そこにひそむエゴイスティックな関心を、真実からの問いかけによって常に自ら批判しつつ、大学人としての営為を展開すること、この一事が大学の歴史から常に要請されているということである。

清沢満之先生は、本学が近代の大学として再出発する時、「自信教人信の誠を尽くすべき人物」の養成を、大学の志願として表明した。それは力を尽くしての真実の探求によって、学ぶ人の内にひそむ利己的関心から自らを解放することに自覚的であると共に、自らの真実の学びを社会に捧げ公開していく者でありたいという、ことに本学に学ぶ主体についての積極的な要請であった。この要請に応答しつつ佐々木月樵先生は、人類の叡知である仏教を、学として広く学界に公開すると共に、教育によってこれを社会に普及することをもって、大谷大学樹立の精神としたのである。それはことに本学における研究と教育は、畢竟これは社会に公開し捧げられるべきものであるという、激しい意欲の表明そのものであったというべきである。実際この要請と意欲に立って、昭和初期の大谷大学は、全国各地に大学講座あるいは拡張講座を開設して、自らの学びの成果を広く社会の志ある人びとに捧げてきたのであった。

現在大谷大学は、大学が起こしたあの痛恨極まりない差別ビラ事件について、これを大学のあり方に対する大きな反省の機会としつつ、仏教の精神に立つ大学という大学の初心に立って、再生の努力を進めている。その中でわれわれはこの事件を惹き起こした土壌として、重層する閉鎖性を抉り出さずにはおられなかった。この閉鎖性を打破すること、この重層する閉鎖性から自らを解放すること、このことが大学再生のための不可避の一歩であると、われわれは強く覚悟しなければならないのである。その時、差別ビラ事件の中で、大谷大学は親鸞の名のもとにある大学ではないのかと改めて問われたこととあいまって、自らを他に対して頑なに閉鎖するセルフィッシュ・エゴイズムの克服こそが本学の初心であったことを、私は強く想起せずにはおられないのである。事は本学の建学の精神の実践と、深く関わっているのではなかろうか。

新しく発足したプロジェクト「大学開放と生涯教育の研究」が、この実践の創造的一歩となることを、心から期待して止まぬ次第である。

大谷大学真宗総合研究所

1989年度「指定研究」研究計画紹介

1989年（平成元年）度の「指定研究」研究事業計画が、研究所委員会で審議され、決定された。本年度より新たに特定研究として、「大学開放と生涯教育の研究」が発足した。これは、「仏教を学界に解放し、直接に間接に之を世間に普及する」（佐々木月樵）という大学開放の理念を基礎とする本学が、自らの閉鎖性を破り、どのようにして現代の社会に応答するかということを研究の課題として設置されたものである。

「真宗学事研究」では、『上首寮日記』の続刊、「条規集」（仮題）の刊行、『厳如上人一代記』の発刊、そして前年度に引き続いた資料収集整理や研究会等が計画されている。「海外仏教研究」では、アメリカや東・南アジアさらにソビエトの仏教研究についての調査を続行する。またビブリオグラフィーをさらに充実してゆく。新しく始動した「大学開放と生涯教育の研究」では、「公開講座」開設を視野に入れながら、当面は基礎資料の収集に専念する。「西蔵文献研究」では、昨年に引き続き、本学所蔵の「北京版西蔵大蔵経」に対する『勘同目録』の編纂を行うと共に、蔵外文献中に見出される稀覯本を続刊する。「大蔵経学術用語研究」では、従来の研究成果をふまえて、本年度より『大正新修大蔵経』の毘曇部の研究に着手し、より完備した索引を刊行する予定である。

研　究　名	研究課題及び研究組織
真宗学事研究 （特定研究代表　学長） 寺川俊昭	研究課題　「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」 研　究　員　大竹　鑑（チーフ・教授・教育学）幡谷　明（教授・真宗学）名畑　崇（教授・日本仏教史学）堀尾　孟（助教授・宗教学）木場明志（専任講師・国史学）草野顕之（専任講師・日本仏教史学）渡辺貞麿（所長・教授・国文学）安富信哉（主事・助教授・真宗学） 嘱託研究員　柏原祐泉（本学名誉教授・国史学）井上　円（本学非常勤講師・真宗学）三本昌之（修士課程修了生・日本仏教史学）深田虎雄、綿谷勝信（以上博士課程修了生・日本仏教史学） 研究補助員　前田一郎、杉本　理、木越　康、江城忠雄、藤原正寿（以上博士課程）山口昭彦（修士課程修了生・国史学） 資料整理員　三木彰円、御手洗隆明（以上修士課程）
海外仏教研究 （特定研究代表　学長） 寺川俊昭	研究課題　「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」 研　究　員　長崎法潤（チーフ・教授・インド学）岩田慶治（教授・社会学）箕浦恵了（教授・西洋哲学）多田　稔（教授・英文学）宮下晴輝（専任講師・仏教学）渡辺貞麿（所長・教授・国文学）安富信哉（主事・助教授・真宗学） 嘱託研究員　今枝由郎（フランス国立中央科学研究所研究員）大河内了義（神戸大学教授）リノ・ベリーニ（本学非常勤講師・日本仏教史学）ジャン・ノエル・ロベール（フランス国立中央科学研究所主任研究員）Y.カルナーダサ（ケラニア大学教授、スリランカ）M・ハーン（フィリップス大学教授・ドイツ）本田パトリシア（修士課程修了生・真宗学・在アメリカ）ロバート・ローズ（博士課程修了生・仏教学・ハーヴァード大学博士課程）畑辺初代（真宗教学研究所研究員）浅野玄誠（元本学非常勤講師・インド学） 研究補助員　加藤　均、茨田通俊（以上博士課程）ビリンダ・アタウェイ（元本学研修員）

研　究　名	研究課題及び研究組織
大学開放と生涯教育の研究 (特定研究 代表 学長) 寺川俊昭	研究課題　「公開講座・それに関する研究、実施および資料の収集整理」 研　究　員　渡辺貞麿（チーフ・所長・教授・国文学）斉藤寿始子（教授・児童文学）木村宣彰（助教授・仏教学）佐々木令信（助教授・日本仏教史学）土戸敏彦（助教授・教育学）安富信哉（主事・助教授・真宗学） 嘱託研究員　瓏　弘信（元本学特別研修員・真宗学）土門政和（博士課程修了生・国文学）
西蔵文献研究 (委託研究 代表 学長) 寺川俊昭	研究課題　「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研　究　員　小川一乗（チーフ・教授・仏教学）片野道雄（助教授・仏教学）小谷信千代、白館戒雲（以上専任講師・仏教学） 嘱託研究員　松田和信（元本学非常勤講師・仏教学） 研究補助員　アレクサンダー・ノートン（元客員研究員）
大蔵経学術用語研究 (委託研究 代表 学長) 寺川俊昭	研究課題　「『大正新修大蔵経』毘曇部関係典籍における学術用語の研究」 研　究　員　鍵主良敬（チーフ・教授・仏教学）福島光哉、古田和弘（以上教授・仏教学）木村宣彰（助教授・仏教学）一色順心、兵藤一夫（以上専任講師・仏教学） 研究補助員　山野俊郎（元本学非常勤講師・仏教学）織田顕祐（元本学特別研修員・仏教学）

研究所出版物の御案内

- 『研究所報』No 1 ～No22
- 『研究所紀要』No 1 ～No 6
- 『研究所紀要』No 4 別冊
  - 別冊 1『教行信証』科文集
  - 2『教行信証』の基礎的研究に関する報告
  - 『教行信証』「化身土巻(末)」校異
  - 研究雑誌所収『教行信証』関係論文目録
- 『上首寮日記』Ⅰ（真宗学事資料叢書）
- 『上首寮日記』Ⅱ（真宗学事資料叢書）
- 『上首寮日記』Ⅲ（真宗学事資料叢書）
- 『真宗学事研究関係文献目録』
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵文献目録索引』
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵大蔵経丹殊爾勘同目録』Ⅱ-1
- 『大谷大学図書館蔵　西蔵語訳大唐西域記』（大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書 No 1）
- 『大谷大学図書館蔵　知識論決択広註善釈要集』（大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書 No 2）
- 『研究紀要』「浄土の諸問題」No 1 ～No 3

上記出版物を販売しておりますので御希望の方は、研究所の方へお申し込み下さい。

価格は、『紀要』No 1 、￥1,500、No 2 ～No 4 、￥2,200、No 5 、￥2,000、No 6 、￥3,300、『紀要』No 4 別冊 1 、￥3,600、別冊 2 、￥4,000、『目録索引』￥4,000、『勘同目録』￥4,500、『大唐西域記』￥18,000、『善釈要集』￥18,000円、『上首寮日記』Ⅰ￥3,000、『上首寮日記』Ⅱ￥3,500円、『上首寮日記』Ⅲ￥3,200、『研究紀要』No 1 ～No 3 ￥700、『文献目録』￥500でお頒ちいたしております。なお『研究所報』は、無料で御希望の方にさし上げます。

＜指定研究＞

1988年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」

研究員・チーフ　名畑　崇

「真宗学事研究」は、1985年度以来上記のテーマに従い、大学史編纂を目的として近世以降の学事関係資料の収集・整理・研究を進めてきた。

1988年度も「刊行」「収集」「研究」の三分野で、従来の資料研究を継続するとともに、新たな作業にも着手した。

1、「刊　行」

a、1987年度刊行予定の『上首寮日記Ⅱ』（天保７年～天保13年）は、原本との照合等意外に手間取り、９月末日発刊となった。この結果本年度刊行予定であった『上首寮日記Ⅲ』（天保14年～嘉永３年）は次年度５月中旬をめどに刊行の予定である。b、「条規集」は、本年度８名からなる編集委員会を結成し、まず前半部分となる学寮時代の資料の読み込み・底本や各制条の内容と題名等の問題について討議を重ねた。ついで明治・大正期の資料では、条規に準ずるものの扱いの討議がなされ、その結果条規・学則のほかこれらの背景ともなり、深く関係する垂示・告知等の資料の掲載もおこなうことにした。この決定に従い、これまで収集した資料の中から取捨選択を行った。１年間に及ぶこれらの討議・資料の読み込みにより、次年度刊行に向けての資料の検討をほぼ終えることができた。名称の決定と、序並びに解題の執筆を待って刊行する。c、『厳如上人一代記』は、第一巻分（1、2、3、4冊）と第二巻分（5、6、7、8冊）の資料原稿を完成し刊行の準備を整えた。

2、「収集・整理」

a、「学科講座変遷表」とb、「教職員在職表」は、教育の現場に理念・構想がいかに反映されてきたかを跡付けし、窺うためのものである。a、「学科講座変遷表」は昨年度に大正期を終えており、本年度は明治期へ遡り「真宗大学要覧」によって明治34年（1901）の真宗大学創立時まで収集整理した。今後は高倉大学寮、さらには江戸時代の学寮講義をも対象として捉え、分類分析しなければならない。b、「教職員在職表」の作業は、各年度毎の人名を整理し、明治34年から大正14年（1925）までの（真宗大学・真宗大谷大学）カードを作成した。次年度は大谷大学以降の分を学科講座別に収集整理する。c、今年度新たに着手した作業として、大谷大学関係諸雑誌の論文の目録作成がある。昭和57年（1982）に『仏教研究・大谷学報・大谷大学研究年報総目録』が大谷学会より刊行されたことにより、『仏教研究』創刊以降の論文目録は公にされ、研究の便に供せられている。この『仏教研究』は、明治28年（1895）に創刊された『無尽灯』を引き継ぐものであり、これが大正９年（1920）に至って『仏教研究』と『合掌』に発展分離したものである。さらにこの『合掌』は、大正13年（1924）には『復興』と改題されている。これら『無尽灯』『合掌』『復興』等の学内雑誌の目録化は、真宗大学・真宗大谷大学・大谷大学と変遷してきた大学の各教員の問題関心・研究成果を知る上で重要である。また時事に関する記事の掲載もあり、大学史を見ていく上で貴重な資料となる。本年度は『無尽灯』の目録づくりを進め、整理を終了した。今後は『合掌』『復興』等の論文目録を進め、公刊したいと考えている。またこれら諸雑誌以外でも『教界時言』『貫練会報』『貫練叢誌』『仏座』『開神』等、目録化して点検しなければならない学事関係雑誌が数多くあるので、それらのリストアップをする必要がある。d、「中外日報」の収集整理。昨年に引続き、収集済みの学事関係資料個々にアルファベットと数字で検索のための記号をつけ、資料台帳の整理を行うことと、索引の作成に主眼を置いたため、新たな資料収集を行わなかった。なお昭和20年（1945）まであるマイクロフィルムの資料を、早急に整理しなければならない。e、『上首寮日記』学事関係資料のカード化。今年は慶応３年（1867）１月～明治５年（1872）11月まで、人名・事項等のカード化を行った。これで『上首寮日記』全５巻のカード化を終え、「学事史略年表」や「講師年譜」作成の資料として利用を図る事ができる。f、「資料整理」。これまで採集した写真資料やコピーを人別・事件別などの項目別に編集合冊し、研究の利便化を図るものである。本年度は宮地義天の日記や樋口龍温の手控を翻刻し、関連資料や論文と共に仮綴じ製本した。g、「学事史年表」作成。これは

高倉学寮における宝暦5年（1755）から明治20年（1887）にわたる安居講義題目と講者を列記した『真宗大学寮講義年鑑』（明治25年刊）より作成した典籍・人物別カードを編年順にパソコンに入力し、検索の能率をはかるものである。このほか「慧空」「宣明」等の年譜カードを入力するとともに、整理と校正を行った。また入力する際のカードについては規格統一など種々の問題点があり、今後の研究におけるコンピュータの役割を鑑みれば、「学事史略年表」作成のための編年処理はデータベースの一形態にすぎず、今後多様な処理方法の開発とデータベースの蓄積を行わなければならない。h、「資料採訪調査」。今年度は新潟県内の講師出身寺院及び学寮ゆかりの寺院調査を行った。徳龍・行忠二人の講師を出した無為信寺では、非常に多数の未発表の講録があり、照合のため持参した著書目録は全く用をなさず、ごく一部の講録の収集にとどまった。また徳龍の日記「不争室日記」が存在することが判明したが確認できず、再訪を考慮中である。また近世における新寺建立に関わる貴重な資料も採集できた。このほか出雲崎では『上首寮日記』最初の記録者である寮司澄海の入寺寺院善乗寺、贈講師智現の浄玄寺、嗣講中観の浄厳寺、寮司善念・善現の光照寺、及び智現に関する資料を所蔵する渡辺秀夫家を調査し、いくつかの新事実をえることができた。この成果は研究会と『研究所報』第20号で報告した。

3、「研　究」

今年度は「条規集」の編纂ということもあり、明治以降の一般教育史や仏教史学の様相というテーマで研究会を開催した。この外明治期における異安心事件や資料採訪調査に基づく研究成果についても発表を行った。

a、1、日　時　1989年3月29日
　　講　題　「近代仏教史学の萌芽」
　　発表者　嘱託研究員　柏原祐泉氏
　2、日　時　1988年12月15日
　　講　題　「新潟県内学寮関係寺院調査報告―水原無為信寺、出雲崎善乗寺・浄厳寺・浄玄寺―」
　　発表者　研究員　　木場明志氏
　　研究補助員　山口昭彦氏

b、講演会

1、日　時　1988年9月14日
　講　題　「明治・大正期の日本教育通史」
　発表者　大谷大学教授　大井令雄氏

2、日　時　1988年10月20日
　講　題　「教団史に於ける信順・請求の法戦の位置について」
　発表者　大谷大学博士課程　畑辺初代氏

c、『研究紀要』

資料紹介として『本山上檀古記録抜萃』を翻刻掲載した。これは江戸時代宗政機構中の最上級機関である上檀の間に於いて記録された『上檀間日記』より学事に関する記事を抜粋し、更に学寮草創に関わるとされる寺院由緒を編集したものである。本資料は明治22年（1889）、文部省の要請で学寮沿革史を編纂した際、参考資料として収集したものと考えられる。

d、『研究所報』

1、「真宗大谷大学の性格について」
　87年度嘱託研究員　桜部　建氏
　これは1988年3月23日に口頭発表されたものを翻刻し、第20号・21号に分割掲載した。

2、「高倉学寮ゆかりの寺坊を訪ねて」
　研究補助員　深田虎雄氏
　新潟県出雲崎善乗寺・愛知県碧南光専寺等を取り上げて採訪調査の成果の一端を第20号で紹介した。

なお畑辺氏の発表は『研究所報』第22号に掲載する。柏原氏の発表についても同様に掲載を予定している。

（井上　円・三本昌之記）

海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

研究員・チーフ　　長崎　法潤

大谷大学真宗総合研究所における「海外仏教研究」は、昭和57年度に発足して以来、一貫して欧米言語によって出版される仏教研究の現状を把握・検討してきた。その主たる目的は、そうした成果を日本の研究者に紹介するとともに、近年益々さかんになる欧米諸国の仏教研究より、特異で有益な方法論を学ぶことにある。

日本における伝統的な仏教研究の歴史は古い。それに対して欧米諸国における仏教研究は、その歴史は浅いが、文献学、歴史学の近代的方法にもとづき、数多くのすぐれた研究成果を生みだしている。明治以降、こうした近代的な仏教研究に対して、日本の研究者の中にも、伝統的な学問研究の方法論に拘泥することなく、積極的に欧米の学問研究の方法論を導入しようとするものも多くあらわれた。

近年、欧米諸国の仏教研究はそうした第一世代をへて、宗教研究の側面において、あらたな方法論の提起をしている。これらは、キリスト教神学と哲学研究、それに文献学などが有機的に昇華して、新たな境地を開拓してい

る。われわれは、その新しい方法論を見極めることによって、日本における仏教研究の方法を問い直していきたいと考えている。

具体的な活動としては、欧米で発表されている著作・論文の文献目録を作成することを主眼とし、そのために必要な資料を収集し分析調査を継続している。

こうした研究の課程における昭和63年度の活動は、概ね以下の5項目に纏めることができる。

1）文献資料の収集

昨年度はおよそ300冊の単行本、100種の雑誌を収集し、必要なデータを抽出した。

2）文献資料のデータベース化

パーソナル・コンピュータ(PC9801VX21)を購入し、既収集データのデータベース化に着手した。具体的には、現在までに収集済みの約3000冊の書籍データを入力し、また、雑誌に掲載されている欧米言語による仏教関係論文から、まず日本仏教関連のものに限定してデータベース化をはかり、ビブリオグラフィーの作成に役立てた。

3）ビブリオグラフィーの作成・発表

2項に記載した日本仏教関連の雑誌文献目録のデータベースを利用して、欧米言語による日本仏教関係の論文目録を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』Vol. 6 (1988) に 'BIBLIOGRAPHY OF FOREIGN LANGUAGE ARTICLES ON JAPANESE BUDDHISM 1960–1987' と題して発表した。

欧米の諸言語によって発表された論文・著作を対象としたビブリオグラフィーの作成は海外仏教研究発足当初からの基幹的課題である。1）の文献資料の収集、2）の文献資料のデータベース化も、基づくところこのビブリオグラフィー作成のための資料収集ならびに収集資料の分析・活用のために行なわれている。

しかしながら、ビブリオグラフィーの作成には、なお解決せねばならない課題が山積している。たとえば、我々が欧米言語と呼んでいる言語範疇もおおいに検討されねばならない問題である。調査の過程で実感することは、仏教研究の意外な広範性である。英・独・仏の3言語に対する当初の予想はそのままに、ロシア語・イタリア語等による仏教研究著作・論文も多く、こうした側面においてもなお慎重に検討せねばならない課題は多い。その他、単に時代順、著者名順に著作・論文を整列させるのではなく、我々にとってもっとも相応しい分類・整理を目途するならば、個々に特異な創造性を有する論文のジャンル分けは容易なことではない。

さりとていたずらに論議を重ね、具体的な対象を提示しないとなれば、衆目の批判・鞭撻もまたかなわない。昨年度は意を決して、比較的分析分類作業の整っている日本仏教関係に限定して前述のビブリオグラフィーを発表した。現在のところ好意的に受け入れられているようすであるが、識者のご批判を仰ぎたい。

今後も、「インド仏教」「中国仏教」など、範囲を限定したビブリオグラフィーを発表し、ご批判を仰ぎながら最新の情報を加味したサプルメントを追加して、全体的なビブリオグラフィーの完成をめざしたい。

4）海外在住研究者及び海外視察者による研究会の開催

「研究会」は、海外における仏教研究の動向を探る、という「海外仏教研究」の基本姿勢に基づき、海外在住（あるいは海外の仏教研究事情に詳しい日本の）研究者を招いて、最新の情報を得る機会として企画されている。今年も9回開催され、今日の仏教研究に関わる重要な研究者から、貴重な研究成果の発表や動向をうかがうことができた。我々が日常的に文献を通じて接しているこれらの研究者から、現在の研究の内容を直接に見聞し、さらにアドバイスを得ることができるのは貴重な体験である。国際的な研究者の交流の活性化する現在、こうした研究会の開催は貴重な情報源となっている。したがってこの「研究会」の特色として、研究発表後、できる限り多くの時間を聴衆の側からの質問、あるいは意見の交換に利用できるよう配慮している。

研究会の発表内容は、一部訂正補遺をなして、『研究所報』『研究紀要』に掲載している。「研究会」は原則として公開で行われ、近郊の大学、研究機関、関係者にも案内し、常時20名以上、多いときは50名程度の規模で開催された。以下に開催日時ならびに発表者、発表題目を掲載する。

(1) 6月23日
「アメリカ仏教学の社会的背景」
ウィスコンシン大学教授　清田　実

(2) 7月14日
'Joyoji Eon's Contribution to Chinese Pure Land Buddhism'
Institute of Buddhist Studies,
Assistant Prof. Dr. Kenneth K. Tanaka

(3) 9月9日
'Parallel Ideas in Abhidharmakośa-Bhāṣya and Patañjala-Yoga-Bhāṣya'
Jaina Visva Bharati, Dr. Nathmal Tatia

(4) 10月11日
「チベット仏教の活仏制度について」
フランス国立科学センター研究員　今枝　由郎

(5) 10月12日
「チベットの仏塔について」
フランス国立科学センター研究員　今枝　由郎

(6) 11月8日
「フランスにおける日本宗教研究の現状」
フランス国立科学センター研究員
Jean Noël Robert

(7) 12月1日

「ウィーン大学留学報告」
元光華女子大学講師　佐藤　智水

(8)12月13日
'Buddhism and Feminism'
Univ. of Wisconsin-Eau Claire
Prof. Dr. Rita Gross

(9)1989年2月28日
「チベットのことばについて」
Tibetan Scholar, Ngawangthondap Narkyid

5）研究員の海外派遣

研究員の海外派遣は2度おこなわれた。

1)海外仏教研究研究員岩田慶治教授がネパールの仏教および民間信仰の現地調査を行った。

2)海外仏教研究研究員安富信哉助教授が、アメリカの複数の大学を訪ね、研究者と交流をもつとともに、アメリカの仏教研究の現状を調査した。

（浅野玄誠記）

西蔵文献研究

「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ　小川　一乗

大谷大学図書館にはサンスクリットから訳された翻訳文献としての「北京版西蔵大蔵経」および「ナルタン版大蔵経」を中心に、チベット人自身によってチベット語で著された所謂「蔵外文献」も含めて、数千点の貴重なチベット語文献コレクションが保存されている。これらの文献は寺本婉雅（1872—1940）によって北京・青海方面で蒐集されたものが主であるが、他にチベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った大谷派僧、能海寛（1868—1901）の収集文献を含み、さらには近年になってインド、ブータン等より購入・寄贈されたものも増えている。

西蔵文献研究班はこれらのチベット語文献を整理・研究するとともに、貴重資料を内外に紹介することを目的に組織され、発足以来「北京版西蔵大蔵経」の勘同目録の作成および蔵外文献中に含まれる稀覯書の研究・出版を継続中である。昭和63年度は勘同目録の編集作業の他、当初より出版が予定されていた蔵外文献中から稀覯書中の稀覯書とでも言うべきツァンナクパの『知識論決択広註“善釈要集”』を刊行することができた。

ツァンナクパ（生没年不詳、12世紀）は、チベットにおける論理学研究に礎を築いたサンプ学問寺の大学者チャパ（1109—1169）の八大弟子の一人で、本書の他に七つの著作があったと伝えられているがいずれも散逸した。本書はインドにおける仏教知識論を大成したダルマキールティ（ca. 600—660）の『知識論決択（*Pramāṇa-viniścaya*）』に対する註釈書である。『知識論決択』にはプトン（1290—1364）とダルマリンチェン（1364—1432）の註釈が知られているが、本書はそれらよりはるかに古く、チベット語で書かれた現存最古の註釈書である。しかも大谷大学所蔵本は世界の狐本で、これ以外には写本も木版本も全く知られていない。本書は、ダルマキールティ研究において計り知れない価値を持つのみならず、チャパの著作がすべて散逸した現在、チベットにおける仏教の流伝後期に大きな役割を果たしたサンプ学問寺系の認識論と論理学を解明する上での第一級資料であると言っても過言ではない。

なお本書の解題については、以前より本文献の重要性を指摘されて複写を求められるなど強い関心を示されていたウィーン大学のシュタインケルナー教授（Ernst Steinkellner）の紹介で、ワシントン大学のファン・デル・カイプ博士（Leonard W. J. van der Kuijp）に執筆いただいた。カイプ博士はチベット仏教の認識論と論理学、特にサンプ学問寺系の文献に関心を寄せられている気鋭の学者である。

本書の出版にあたっては、臨川書店との契約に基づき、『大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書』第2巻として同書店から刊行された。同叢書第1巻は前年度に出版されたモンゴル人グンポキャプによって訳されたチベット語訳『大唐西域記』である。両巻は現在当研究所においても取り扱っているので入手希望者はお問い合せいただきたい。

蔵外文献については次年度以降も整理を終え次第、順次出版を予定しているが、現在次のような文献をリストアップしている。

(1) No. 13949—13954　中観論書集
(2) No. 13955—13956　アビサマヤ関係論書によるセラ寺教科書集
(3) No. 13957　『入中論』によるセラ寺教科書
(4) No. 13972　サキャ派所伝の『倶舎論』古註釈
(5) No. 13984、13987　ウパローセルの文法書
(6) No. 13983　カラーパの文法書
(7) No. 12460　チベット語による中国仏教史
(8) No. 13981　サンプ学問寺歴代管長記

（松田和信記）

大蔵経学術用語研究

「日本撰述の倶舎論関係典籍における学術用語の総合的研究」

研究員・チーフ　鍵主　良敬

本指定研究は昭和62年度に引き続き、「日本撰述の倶舎論関係典籍における学術用語の総合的研究」という研究課題のもとに、『大正新脩大蔵経』全100巻のうちの第63巻・第64巻及び第65巻の一部に収められる日本撰述の『阿毘達磨倶舎論』に関する注釈書類（日本撰述の『中論』に関するものを含む）の解読研究に従事した。

今ここで改めて言うまでもなく『大正新脩大蔵経』全100巻は、最も整備された仏教典籍の集大成として不動の価値を有している。それは単に仏教の三蔵を網羅しているということのみならず、それらの典籍を生んだ時代の政治・経済・社会機構・法制や、仏教と他思想との交流などの諸記録を含んでいることからして東洋の思想文化全般を知るための重要な基礎資料であるとも言うことができる。従ってこのような豊かな内容を持つ『大正新脩大蔵経』を一部の専門的な研究者のためだけでなく、広く人類全体に開放するためには、取り付きにくい蔵経の本文に対する簡便な手引きが必要である。『大正新脩大蔵経索引』はこのような意図のもとに企画され、研究が推し進められてきた。従って多くの一字索引がそうであるように漢字を単に記号として扱い、その検索を容易ならしめるためだけに企画されたものとは、本質的な意図が異なるのである。大谷大学はそうした便宜を世界に提供すべく他の仏教系五大学と共同して、大蔵経学術用語研究会を組織し、積極的に研究の一翼をにない、その成果を昭和36年以来既に八冊の『大正新脩大蔵経索引』として刊行してきた。「日本撰述の倶舎論関係典籍における学術用語の総合的研究」は、大谷大学が担当する最後のものであり、昭和63年度はその最終年度に相当する。従って前年度までの研究を踏まえて、本年度末にはそれらの成果を『大正新脩大蔵経索引』第35巻続論疏部１として刊行する計画であった。

周知のように世親の『阿毘達磨倶舎論』は仏教の教義を知るために不可欠の用語や概念などを最も適切にまとめたものとして古くから重視されてきた。いわば仏教教理の基礎学を明すものと見做されてきたのである。従って多くの人々によって研究され、注釈書も少なからず現存している。今回の研究の直接の対象である日本人の手になる注釈書群もその時代の学風や研究者の目のつけどころを窺い知る上で貴重なものである。

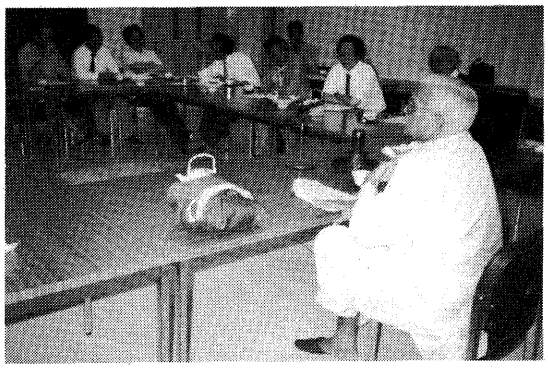
既に若干触れたように、本研究の成果として刊行される索引は、当該典籍の中に含まれる様々な学術用語の研究整理の結果として出版されるものであって、単に文字の検索のためにのみ製作された索引とは意味が異なる。従って本索引の作成にあたっては、他の如何なる事柄にも優先して当該典籍の厳密な解読が為されなければならないこととなる。このような理由によって昨年度以前は、日本撰述の倶舎論関係典籍の解読研究に大半の時間を割いてきた。その結果として、約12万語以上の学術用語が精選され、カード化された。『大正新脩大蔵経索引』はこれらの学術用語を五十音順に並べてその蔵経中における所在を示した音次索引と、これらの用語を預め定められた30の異なる範疇に分類して五十音順に並べた分類項目別索引との二部を主な内容とする。従って選出された約12万以上の用語の一つ一つに対してそれが定められた30の項目のいずれに該当するかを決定し、その後で全ての用語を五十音順に配列するという過程をとることになる。

昭和63年度は、こうして出揃ったカードを出版社に持ち込むための原稿化の作業の継続から始まった。用語をカード化する時もそうであったが、こうした作業には多くの学生諸君の協力が不可欠である。何分にも12万余のカードを一枚一枚原稿用紙に書き写していくという途方もない作業なのであるから。学生諸君の献身的とも言うべき協力を得て五月上旬にはこの作業も終了し、直ちに出版社へ搬入した。そして七月下旬には早くも活字化された原稿の第一便が送り返されてきた。以後、初校・二校を経て三校・念校終了に至るまで遠々と校正作業が続いたのである。この過程で今回特に問題となったことは、今まで常套としてきた活版をやめて電算写植を導入したことである。従来の活版による印刷方式に関しては、我々の側にも既に多くの経験と実績があり、出版にこぎつけるまでの手順等もほぼ自家薬籠中のものとなっていた。今回電算機を導入するにあたり、我々は従来の手仕事の持つ良い部分はそのままにして、都合の悪い部分のみを機械によって改善できるつもりであったので、この初めての方式に全く不安を持たなかった。しかしながら、いざ蓋をあけてみると従来からは全く考えられもしないトラブルに再三再四見舞われることとなった。その内容は筆舌に尽し難いが、瑣細な一例を挙げてみよう。例えば、従来の活字方式であればこちらが訂正しない限り一度採用された文字が他のものに変わることなど原則的にあり得ないが、電算機では一つの操査ミスによって何も指示をしていない文字が別の文字に変わってしまう。それも特定の一箇所のみではなく全ページの同一文字全てに亙ってである。これはもう校正云々の次元ではとうてい片付かない問題である。また機械自体のトラブルによって何ページもの記載が欠落してしまったこともあった。そうした我々には全く理解不可能な様々な問題を処理しながら、一方では同時に本索引収録の典籍に関する解題や、本索引についての凡例をまとめていった。また音次

索引の索引とも言うべき検字索引――音次索引の首字を総画数と四角號碼によって検索できるようにしたもの――を作成し、これらも順次活字化していった。

こうして出来上った『大正新脩大蔵経索引』第35巻続論疏部１は、音次索引483ページ、総609ページにわたるものとなった。この索引の完成によって13世紀から19世紀に至るわが国における『倶舎論』研究の展開がより正確に把握されるであろう。『倶舎論』が仏教研究の基礎と見做されてきた歴史の上から言えば、その研究の展開はわが国における仏教研究の変遷を如実に物語るものと言うべきであり、それによってその時代の学的傾向を窺い知ることも不可能ではない。また今日においては、『倶舎論』本論の研究の上で、従来の伝統的解釈を参照するための有力な手がかりとなることは間違いない。この他にも本索引の有効な利用の仕方はほとんど無数にあると言ってよい。この索引が有縁の人々の研究に資することを願って止まない。

（織田顕祐記）



1988年９月９日　海仏研「研究会」
Ｎ・タティア博士の講演

1988年12月13日　海仏研「研究会」
終了後のパーティ　中央　リタ・グロス教授

＜一般研究＞

１９８９年度「一般研究」研究目的紹介

＜共同研究＞

教行信証の書誌学的研究

研究代表者
本学教授　臼井　元成
（真宗学）

親鸞の主著であり、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』は、二回向四法の組織をもって、大乗としての浄土の仏道大系を確立した論書である。その『教行信証』の厳密で正確なテキストの作成が、内外から必要とされている中で、現行の『定本親鸞聖人全集』第一巻所収本の抜本的な活字組みなおし、及び校異における基礎的な資料づくりが重要課題となっている。われわれは、坂東本を機軸として親鸞の著述をより原形のままに活字化し、諸本との校異や異体字や圏発表記なども念頭に入れた書誌学的な研究を行なうことを課題としている。

『教行信証』は、文類の形式を採りつつ、その大部分が引文であるが、創造的な思想再構築がなされている。それを解明するためには、引用された経論・釈それぞれに関して、原典における位置を確認し、引用の特徴を探ることが必須要件である。また同時に、引用に際しての省略（「乃至」部分）を検討し、いかなる意図に基づいた引用であるか考察しなければならない。そうした作業を通じて、親鸞が文類を構成する中での思想的独自性を解明することを行なっていきたい。

この「引文」の特色を探る作業と、テキストを諸本対校の上で作り直す作業は、『教行信証』の構成・成立を解明するものである。この研究にあたっては、既に先学先輩によって研究成果が挙げられている。現在までに、「化身土」末巻（昭和59、60年度一般研究、その成果は『研究所紀要』第４号及び別冊１・２として公表）、「教・行」巻（昭和62年度一般研究）、「信」巻（昭和63年度一般研究）について、その作業が行なわれてきている。

しかしながら、「証」「真仏土」「化身土」本巻の各巻については、まだ研究作業が行なわれていない。『教行信証』六巻を通じた基礎資料を仕上げる意味で、未作業部分の解消が強く望まれるところである。今年度、われ

われは「証」「真仏土」の二巻について作業を行なう予定である。

「証」「真仏土」の作業については、研究作業を二班に分けて、以下の内容について作業を行なう。

〔A班〕「証」「真仏土」巻のテキスト作成

(1)坂東本を影印本により、字体・字数・行数・圏発などにわたって、真蹟本の形態通り原稿化する。また丹山本の写本により朱点を校異する。

(2)西本願寺・高田専修寺蔵の二本の影印本と照合・校訂を行なう。

(3)江戸期の段本六種（寛永本・正保本・明暦本・寛文9年本・寛文12年本・天保本）との校異を行なう。

〔B班〕「証」「真仏土」巻の引文と大正新脩大蔵経の諸経論釈を照合・校異し、字句の異同や省略部分の検討を通して、引用の意趣を探りながらその問題点を明確にする。

以上の内容をA・B二班で作業を進めていくが、共同研究としての利点を活かして、研究班内での各人の小研究発表などを通して相互の成果を交換しあい、有益な研究成果をまとめあげていきたい。

＜共同研究＞

外国語教育と聴覚障害教育における言調聴覚論の研究

研究代表者
本学教授　内藤　史朗
（英文学）

日本の外国語教育は従来の経験から出された方法から、新しい国際化時代に対応した方法を模索している。神経生理学やエレクトロニクスの発達と、ラングからパロールに重点を置き換える言語学の新しい流れとが、ザグレブ大学(ユーゴ)のグベリナ教授にベルボ・トナル・メソッド（言調聴覚法）を開発させた。それにもう一つグベリナ教授がこの方法と理論（言調聴覚論）を考案するにあたって、その基礎的理論を提供することになったのは、聾児や難聴児を対象とした聴覚障害児の教育であった。したがって、聴覚障害教育はどうしても踏まえておかねばならないと考えられた。

聴覚障害児に言葉を教える場合、障害のある聴覚以外の感覚、たとえば触覚を使う方法はかなり以前から考えられて来た。グベリナは、この点に着眼、これを理論的に説明した。「聞こえない音声は発声できない」という従来の音声学の常識を覆したのは、グベリナである。触覚に換えられた音声を聴覚障害児は訓練によって聞き分け発声したからである。

グベリナによれば、聴覚の正常な学生が外国語を習得しようとする際、その学生は外国語の音声に対しては、聴覚障害児と同質の条件、状態を有している。人間の神経体系は、12歳を過ぎると母国語によって支配され、異質の外国語の音声は、排除されるか、近い母国語の音声に置き換えて聞き取っている。間違った音声を聞き取っているので、発声は困難となる。正確な外国語の音声を発声可能とさせるのがグベリナの方法である。聴覚の正常な学生には、周波数を切り換えることによって、リズムやイントネーション（抑揚）を覚えさせる。このリズムと抑揚が、言語生活で重大な比重をもち、発語発声の明瞭度をほとんど支配しているという指摘もグベリナの新しい見解である。

周波数の切り換えは、グベリナの考案したスヴァグという機器によって行われる。

本年、スヴァグⅡ型（難聴者用）を導入し基本的原理の理解と、そのためのデータを集めたい。研究陣容は、英独仏三ヶ国の現場の教授陣と言語学の立場から専門家を配し、聴覚障害教育としては、英語教授陣の中から、その方面の著作があり、教育運動も行って来た人を配した。

なお、グベリナの論文、著書は仏語で書かれることが多いので、仏語の専門家に飜訳面での文献指導をあわせてお願いした。

＜個人研究＞

T３ファージ・プロヘッドのコネクターの分離と構造解析

研究員
本学助教授　加藤　尚子

バクテリオファージの頭部と尾部の連結部をコネクターという。T３ファージのコネクターはgp８（遺伝子８でコードされるタンパク質）の12量体で構成されたリング状の構造をしている。ファージの形態形成の研究からプロヘッドと呼ばれる頭部前駆体にＤＮＡがつめ込まれて頭部が完成することがわかっている。その際ＤＮＡはこのコネクターを通って頭部内に入ると考えられている。すでに完成した頭部からコネクターを精製して電子解折でその構造が調べられた結果の報告によるとリングの穴がＤＮＡが通れる程大きくないということがわかった。この結果はＤＮＡがコネクターを通過後、コネクターの穴がせばまることを示唆している。このことはいったん頭部に入ったＤＮＡが頭部から出るのを防ぐという目的にもかなっている。もしそうならばＤＮＡが通過する前のコネクターの穴はＤＮＡが通過できる程に大きいことが期待される。本研究の目的は次のようである。

①未だＤＮＡの入っていないプロヘッドからコネクターを分離精製して構造解析を行い、ＤＮＡが入る前と入った後の頭部でコネクターの構造の変化があるかどうかを調べることにより、ＤＮＡつめ込み過程とコネクターの構造変化の関係を明らかにすることである。②Ｔ４プロヘッドの再構築実験から生成直後のプロヘッドは尾部との連結部だけでなく全ての頂点にコネクターが結合していることが示唆された。Ｔ３プロヘッドにおいても多数のコネクターがプロヘッドから分離したと考えられる現象が観察されており、全ての頂点がコネクターで占められている可能性がある。又一方、ＤＮＡがプロヘッドにつめ込まれる過程の途中でプロヘッドの構造変換が起ることが報告されている。ゆえにこの構造変換と基部を残した他の頂点からのコネクターの分離が関係あるのではないかと考えられる。ＤＮＡつめ込み過程での頭部構造変換とコネクターの関係を調べることにより、Ｔ３プロヘッドでも全ての頂点にコネクターが存在していることを明らかにすることができる。又、この研究を通して頭部構造変換の詳細を知ることを目的としている。

＜個人研究＞

平安朝寺院組織の研究

研　究　員
本学助教授　佐々木令信

本研究は、平安朝寺院の管理運営組織を探究し、その比較・検討によって、大寺院の内部機構、構成員の身分階層などを総合的にあきらかにすることを目的とする。具体的には、延暦寺の霜月会と興福寺．薬師寺の慈恩会（宗祖会）をとりあげて、関連する文献史料を検討するのはもちろんであるが、現在おこなわれている法会を見学・調査することにも留意して、法会の準備・勤修・管理の過程に寺院の機構・組織が集中的に現われることに注目したい。法会の趣旨、作法とその構成、堂内の荘厳、声明などの内容は、その思想・信仰を表現している。霜月会（10月24日）と慈恩会（11月13日）のばあいをみれば、前者は延暦寺、後者は興福寺・薬師寺の機構が機能して法会を支えているわけであり、平安朝大寺院の組織の一般的、基本的構造とその寺院の特色の一端を明らかにできるようにおもう。

＜個人研究＞

昭和初年曽我量深・金子大栄大谷大学追放事件の研究

研　究　員
本学専任講師　三明　智彰

本研究は、昭和初年に大谷大学に於て惹起した事件、すなわち、曽我量深・金子大栄を「宗義違反」「異安心」として大学から追放した事件の本質を、真宗教学の基点の決定という観点から明らかにしていくことを目的とする。

近年、真宗教学の基点が何であるかということが、内外から厳しく問い糺されており、それを明らかにすることは、早急になされなければならないことであると思われる。また、今日の真宗学・大谷大学・真宗大谷派教団の現状と教学的使命を点検し、明確化するためには、昭和初年のあの事件の本質的究明を欠かすことはできない。したがって、単なる事件の経過整理を主たることとせず、教学の視点から考えたい。

事件の事実経過については、すでに、真宗総合研究所に於ても、諸氏の努力によって、「中外日報」などの資料収集が行なわれており、さらに調査収集によって、いよいよ明らかになるにちがいない。

本研究も、事実経過の解明をすすめるとともに、さらに事件の本質を上述の如く教学基点の決定という問題から探って行きたい。

年度内には、①事件当時に、大谷大学に在学していた諸氏の証言を取材する。②上杉文秀・河野法雲・村上専精・住田智見等の諸学匠の真宗教学の姿勢とその思想を検証する。③曽我量深・金子大栄両師の教学思想を事件以前の著作等にも遡って研究する。以上を目的として研究を進めていきたい。

＜個人研究＞

浄瑠璃の仏教的研究

研　究　員
本学専任講師　沙加戸　弘

近年、浄瑠璃の研究は、近松門左衛門を中心として進展を見、古浄瑠璃についても基礎資料の充実が著しい。

しかしながら、その作品研究ということになると、近松作品以外は極めて不十分と言わなければならない。

また、全浄瑠璃史を通じて、その重要な要素である仏教については、その視点さえ欠くと言って過言ではない。

浄瑠璃における仏教性、ならびに浄瑠璃の展開に与えた近世庶民仏教の影響を考えないかぎり、演劇としての、あるいは文芸としての浄瑠璃研究は完全を期すことができない。

このような情況に鑑み、特に古浄瑠璃に焦点を絞って、浄瑠璃のもつ仏教性を分析し、浄瑠璃史における近世庶民仏教の役割を明らかにしようとするのが本研究である。

＜個人研究＞

日本泳法の伝播に関する研究
――観海流の伝播に関する基礎的調査研究――

研　究　員
本学専任講師　中森　一郎

日本泳法とは、現在(財)日本水泳連盟が公認している十二流派（向井流・水府流・水府流太田派・観海流・岩倉流・野島流・小池流・神伝流・水任流・山内流・小堀流・神統流）のことを云う。

この日本泳法は、我が国独自に伝承されてきた泳ぎの文化で、徳川時代に武術としての形成がなされ、各流派には家元或いは、師範と称される最高権威者が存在している。

今日において、この十二流派の多くは、地方における重要無形文化財の指定を受け、その保存と普及が盛んとなりつつある。

しかし、この日本泳法各流派の伝播に関わる具体的な調査研究は、未だ充分に行なわれていない。

日本泳法の存続と伝播は、切り離せない重要な問題である。

また、伝播の実態を究明していくことは、日本の伝統的な運動文化の在り方、広くは伝統（伝承）文化の在り方を捉えていく上で、重要な手掛りを得ることになると考える。

本研究で取り挙げる観海流は、嘉永５年（1852）武州忍藩浪人宮発太郎信徳に依って津藩（現三重県津市）に伝えられた泳法流儀で、蛙足平泳ぎを泳法の主体とし、遠泳（団体渡泳）を重視している流派である。

現在、第四代家元山田謙夫氏（津市在住）に受け継がれ、津市の重要無形文化財の指定を受けている。

戦前において観海流は、海軍の基本の泳ぎ（平泳ぎ）に採用されたことに依って、“平泳ぎ”即ち“観海流”と称される程に至ったと言われている。

しかし、観海流において、戦前に１道２府15県に及ぶ100校以上の学校が学び伝播を受けていることも、同流を広く知らしめる上で貢献するところ大であったと推測できる。

また、観海流の流派存続の上で、戦前の学校への伝播は重要な役割りを果したとも考えられる。

今般、家元の御好意で、家元所蔵『観海流修業証書授与録』等の復写と調査研究を行なうことの許諾を幸いにして得ることができた。

この調査研究に依って、観海流の伝播に関わる大凡の実態・分布を明らかにすることが可能であると考える。

また、今日迄に私が行なってきた京都府下学校への観海流の伝播に関する研究から、観海流の学校への伝播へと研究を進めていく上で、重要な手掛りが得られるものと思われる。

＜一般研究＞

1988年度「一般研究」研究概要

＜共同研究＞

教行信証の基礎的研究

研究代表者
本学教授　細川　行信
(真宗学)

当研究班は『顕浄土真実教行証文類』の書誌と文献についての基礎的な研究を行うもので、構成員を書誌研究のA班と文献研究のB班に分けて、それぞれ前年度の教・行・2巻に引き続き信巻の研究を進めてきた。以下その作業内容を略述すると、

まずA班は、

(1)　『定本親鸞聖人全集』第1巻と『教行信証』古写本3本（坂東本・西本願寺本・専修寺本）との比較校異

(2)　『教行信証』版本7本（寛永本・天保本再刻寛永本2本・正保本・明暦本2本・寛文本）の比較校異

(3)　坂東本と信珠院順芸書写の丹山本正副2本（旧高倉学寮本・禿庵文庫本）との比較校異

の3項目を出来うる限り忠実に行った。

このうち、(1)の作業は底本作成であり、坂東本の1葉における行数・字数・改字など、可能な限りの字体の翻刻を行ってのテキスト作りを試みた。特に添削が確かめられるならば、それによって親鸞の思想とその形成の一端を知る手懸りともなり得よう。

つぎにB班では、信巻引用典籍の大蔵経所収本との校異を行ってきた。これはA班の作業と同様、『研究所紀要』別冊「化身土巻」（末巻）校異の続篇として、他の5巻も整備してゆこうとする目的に沿ったものである。さらに、その校異の中で示し出された「乃至」の箇所について、分担を決め詳細な解説を付すことを試みた。このことによって信巻引文の、原典籍の文脈における文意と、『教行信証』に用いられた時の文意、この両者の相違をよく提示することが出来るであろう。

さて、そのような「乃至」の語に付した解説を通覧するとき、それら省略の持つ意義が一様のものでないという事実に気づかされる。つまり、同じ「乃至」の語によって文の省略がなされていても、その意図されているところが典籍によって大きく異なるのである。例えば、『観経疏』（散善義）からは、三心釈がかなり長く引用されており、この中にも幾つかの「乃至」が含まれている。短いものでは36字、長いもので731字に達する。講録等では、これらについて主に化巻（本）との関係を指摘している。つまり、当面において行者の側で行われる読誦・観察等の行を信巻では「乃至」し、これを化巻に配すという、この化巻との重層関係が『散善義』における「乃至」の持つ一つの大きな特徴と考えることができるのである。

一方、これに対して『安楽集』における「乃至」は、これとはかなり性格を異にしている。信巻は、『安楽集』に引かれる諸経論の中から「真仏弟子」を明らかにするという課題にふさわしいもののみを抽出、引用する形をとっている。そこで、一旦「乃至」された文について、改めて注意が払われるということはない。つまり『安楽集』からの引用は、表面的な形だけから言えば『大集経』『涅槃経』『大経』等からの直接の引文と大差のないものとなり、そこには『安楽集』そのものの文脈的展開についての配慮は余りなされていない様である。このことは、「乃至」をはさんで、引文の前後の順序が自由に入れ替えられていることからも窺われる。

このように信巻では、同様に「乃至」の語において省略がなされている場合でも、その内実はかなり多様であり、典籍ごとにその異なりを認めてゆくことができるのである。

以上の様な視点に立って、例として(1)『観経疏』（散善義）引文における「乃至」、(2)『安楽集』引文における「乃至」、(3)『涅槃経』引文における「乃至」をとりあげ、その省略状況を提示し、比較考究を行ってみた。さらに上にあげた典籍以外についても、もしあればその省略状況に簡単に觸れ、信巻全体において「乃至」による省略がどのような形で行われ、又それがどのような性格を持つものであるのかを考察しつつ、研究を進めた。これによって、信巻引文の担う課題の所在がより明確に示されることであろう。

＜個人研究＞

パーリ仏典における大乗的思潮の形成

研究員
本学助教授　吉元　信行
(仏教学)

一般に、南北両伝のアダビルマ仏教並びに今日に伝わる南伝のパーリ仏教は、いわゆる小乗仏教であると理解されている。しかし、これらの中には、驚くほどに大乗的な思潮が認められることがある。その代表的なものは、燃燈仏や弥勒仏を始めとする過去仏・未来仏の思想や波羅蜜・菩薩の思想であろう。そしてまた、現今の南方仏教徒の間には、未来仏〝弥勒〟の信仰も広く流布していることもあまり知られてはいない。この他、南伝の『ジャータカ』や『アパダーナ』・『ミリンダパンハ』、あるいは北伝の『倶舎論』等に見いだされる大乗的思潮は枚挙に暇がないほどである。

それらの思潮のいくつかを検討してみると、仏教の根本分裂以前の前大乗的思想がそのままパーリ仏典に伝えられたと思われるものと、それ以後の北伝の大乗仏教の影響を受けたと思われるものの両面が認められる。本研究では、特にそのうちの前者の代表的思潮であると思われる過去仏・未来仏の思想をとりあげ、原始仏教におけるそれら大乗的思潮の起源と形成過程を究明することを主要テーマにした。

従来、この種の研究には、主として原始経典が研究資料として用いられてきた。しかし、最近の経典史研究の成果によると、その原型の成立の古い原始経典であっても、後世の付加・増広が見られることが分かり、そのことが、こういう思想史的研究には大きな障害となっていた。そこで、本研究では、嘱託研究員柏原信行氏及び研究補助員茨田通俊氏の協力を得て、原始経典以外の新資料やサーンチー大塔におけるレリーフ等の考古学的資料、あるいは、中国求法僧のインド旅行記等の実証的資料を用いることによってこれらの障害の克服に努めた。

特に、文献としては、従来あまり用いられることのなかったアッタカター文献、パーリ仏典の中でも大乗的色彩が濃く認められる新資料“Sārasaṅgaha”、あるいは、本学図書館所蔵の新資料クメール・ユアン文字によるパーリ語写本などを参考にした。関連文献の主要部分はすべてパソコンに入力し、それらのデータを資料の検索・分析・解読研究に活用した。また、研究員吉元は、本年2月インドに渡航して、サーンチー・アジャーンター・エローラ等を実地調査し、さらにインド各地の博物館を訪問し、これら考古学的資料を収集した。

本研究では、年間を通じて、次のような3つの基礎作業に分けて研究を進めた。

1．関連文献のパソコン入力

“Sārasaṅgaha”の本研究関連部分をワープロ（Koa-TechnoMate）により、データ入力した（柏原・茨田）。このデータ分析により、“Sārasaṅgaha”は、そのほとんどがアッタカター文献からの引用であり、このことから、かなりソースの古いアッタカターにも大乗的思潮が多く認められることが判明した。これらのデータの詳細な分析には時間的余裕がなかったので、このデータの蓄積は今後の研究にさらに役立つであろう。

2．サーンチー塔門のレリーフの写真整理

仏塔は大乗仏教の源泉であるといわれる。ことに紀元前2世紀のサーンチー第一塔のトローナは、ほぼ完全な形で当時の原型を留めているまれに見る考古学的宝庫である。本年度と2年前の現地踏査により吉元研究員が撮影した写真に、昨年度茨田研究補助員の撮影した写真を加えて、4つのトローナにおける全てのレリーフの写真を遺漏なく体系的に整理した（茨田）。このほか、整理はできなかったが、第二塔欄楯・第三塔トローナのレリーフ、エレファンタ島・アジャンター・エローラ等各石窟寺院内のレリーフや壁画、ブダガヤ欄楯のレリーフ、カルカッタ・デリー・サルナート・ブダガヤ・ナーランダ・マトゥーラ等各博物館における主要な仏教美術の写真などが本研究の一貫として収集された。

3．研究会

研究員・嘱託研究員・研究補助員がそれぞれ分担課題をもち、時には客員の研究者を招き、合計32回の研究会を催して、上記2つの作業の結果の分析・調査・検討・輪読等を行った。分担課題：吉元＝原始仏教における過去仏思想の形成、柏原＝パーリ仏教における未来仏思想の展開、茨田＝関連文献調査とアッタカター文献の解読。

以上の基礎作業の成果をもとにして、平成元年四月現在、3人の共同執筆による、研究成果報告「原始仏教における過去仏・未来仏思想の形成」と題する研究論文を作成中である。この論文によって、原始仏教思想における大乗的思潮である過去仏・未来仏思想形成の起源及び思想史的・文化史的背景とその形成過程が究明され、そのことによって、仏教思想史上に占める大乗仏教思想の特質があらためて確認されるであろう。

＜個人研究＞

生と思想
——F・ニーチェを中心として

研　究　員
本学専任講師　須藤　訓任
(哲学)

ニーチェの思想は一般に三つの時期に区分される。つまり、『悲劇の誕生』を中心とする芸術家形而上学の初期、つづいて特に『人間的、あまりに人間的』にみられるような実証主義の中期、そして、主著『ツァラトゥストラはこう語った』に結実する「権力意志」と「永劫回帰」思想の後期、である。このように三区分される根拠の一つはニーチェ自身『ツァラトゥストラ』の中の「三段の変化」で与えているが、その区分を既定のものとして受け入れるにあたっては、むろんそれなりの注意が必要であろう。なぜなら、初期から晩年まで一貫して主張されている思想も確かにあり、したがって、その思想をニーチェの根本思想とした場合には、多少の変動はあるにせよ、ニーチェの思想は基本的には生涯無変化だったことになるし、また、「三段の変化」を認めた場合でも、その変化がいかにもニーチェ的な内発的欲求にもとづいているとするならば、その変化こそがニーチェの変わることのない姿勢を浮かび上がらせている、とも言えるからである。しかし他方、そうしたことを認めたうえで、というか、認めればこそ、ニーチェのそれぞれの著作およびその周辺の遺稿がどのような思想を提示し、また互いにどのような関係を形作っているのかを、具体的にさぐってゆく作業が要請されよう。そして、これまでのところ研究員（須藤）としては、先の留保を考慮してなお、（詳しい論証はここでは不可能だが）やはりニーチェの思想を三つの時期に区分するのが適当である、少なくとも便利である、と考えている。

そのように区分した場合、過去およそ百年間のニーチェ研究史において、後期思想の研究が特にさかんであり、つづいて初期に焦点があてられていた、と言えるだろう。つまり、中期の研究が極端に少ないのである。研究員自身、これまでは初期か後期に目がゆきがちであった。本研究は、こうしたニーチェ研究の現況の欠落を埋めることを一つの目論見としている。

中期の研究が不十分なのにはそれなりに理由がないわけではない。『悲劇の誕生』の「ディオニュソス的—アポロン的」とか後期の「超人」「権力意志」「永劫回帰」といった、いかにもモットーとしても通用しそうな思想が中期にはみあたらないこと、および、そのことと連動して、当時のニーチェは他者の主義主張や時代風潮等を批判はしても、その批判の源たるべき彼本人の根本姿勢を明瞭に打ち出さず、ために中期思想の全体像が整合的に促えにくいこと、こうした事情がともすれば中期に過渡期の印象を刻印し、その精力的な研究を妨げる一因となっていたと思われる。その意味で、当時のニーチェはいわゆる「ニーチェ」ではなかった——そのことには研究員としてもある程度同感せざるをえない。

ところが、時として「場あたり的」と思わせかねないほど、さまざまな事象の批判に没頭して首尾一貫した姿勢を示さないこと、このことこそがニーチェの狙いだったとしたら、どうだろう。換言するならば、根本的信条、ニーチェの言葉を用いるならば「信念」にこりかたまり、それに固執し余裕を失った状態、そのことにニーチェは当時の人間社会の病をみていたのである。同時代の人々がよかれと思ってすることがみな裏目に出るような状況、というか、人々が自己の信条にもとづいて謳いあげる理想・理念が、そしてそれらの理想相互間の闘争に由来する喧騒が、逆に人々をして出口のない泥沼にはまりこませてゆく——ニーチェの時代診断はこのようなものだった。とするならば、ニーチェにとって自己自身の「信念」を形成し主張することなぞ思いもよらぬことになろう。整合的な思想としては曖昧模糊とした中期ニーチェのアフォリズム群は、こうしてニーチェを当時の時代状況の中に、また具体的な人間関係の中におきなおしてみることで、整合性の欠如にこそその戦略が秘められていることがおぼろげながらも明らかとなってこよう。その時代とは、近代化と国力増強に血なまこになっていた一八七〇年代のドイツであり、その中で疲弊し重労働にあえぐ労働者であり、またそうした人々に「麻薬」として作用する芸術（ワーグナー）であった。

中期のニーチェは自己の存在の一切を認識に向けようとする。認識者に、つまりは、傍観者に徹しようとする。そこに時代の病を癒やす唯一の治療法がある、と彼は考えた。従って、傍観者的認識のみをして彼の生の内実たらしめねばならない。それは「琥珀のなかの虫」の生である。

以上に要約された研究成果は、昨年（一九八八年）十一月「ドイツ文化・社会史学会」のシンポジウム（総題「近代とユートピア」）において「琥珀のなかの虫——ニーチェ中期のユートピア」と題して発表された。

研究予算は九割以上図書・雑誌に費やされた。その大半は、ニーチェ研究書はもとより、一九世紀西洋史関係、心理学関係、そして最近の英米およびフランスにおける文学理論の書籍である。

＜個人研究＞

中国近世前期における仏典の開版と伝播

研究員
本学教授　藤島　建樹
(東洋史学)

唐中期以降の木版印刷の発展にともない普及した仏典の開版や伝播に関する研究は、従来より行われてきたが、近年日本・中国等において新しい資料や研究が発表されるようになってきた。中国において新たにはじめられた『中華大蔵経』の出版に際しては、宋・金・元・明諸版の大蔵経はいうまでもなく、房山石経やその他単刻の仏典による対校が行われて、それにともなう仏典開版と伝播に関する資料や研究もさかんに公開されつつある。一方日本においても、増上寺をはじめとする諸寺の経蔵の詳しい調査が行われ、その報告書や研究が発表されている。また対馬において従来知られる版式と異なる元版大蔵経零本と推定される華厳経が発見されるなど、宋元版仏典についての情報が提供され整理されるなかで、新たな問題点も浮かんできている。さらに、これら仏典の開版と伝播に関する調査・研究が、その時代の仏教史・文化史のみならず、政治・経済史研究にも有用な資料を提供するものとして注目されている。

本研究はこのような学界の情勢に対応し、「中国近世前半期における仏典の開版と伝播の研究」のテーマのもと、仏典の開版と伝播を鍵として、中国近世前期の仏教受容の実態をとらえることを最終目標とするものである。その基礎作業としてまず本学図書館所蔵の宋元版仏典の書誌調査、及び宋元版仏典に関する資料・研究の収集整理を行うことを本年度の目的とした。

本学図書館に少なからずの宋元版仏典が存することは、その蔵書目録や、京都大蔵会の展観目録等によって従来より知られるところであるが、個々の経典の法量・版式・刊記・序跋等の書誌事項を網羅的に研究・紹介したものはなかった。また近年故神田喜一郎博士の旧蔵書の寄贈をうけ、その中にも宋元版佛典の善本が多く含まれ、その一部は『神田鬯盦博士寄贈図書善本書影』に掲載されているが、その全てが紹介されたわけではない。

そこで研究開始当初、まづ蔵書目録により宋元版仏典を検出する作業を行い仮目録を作成した。またこれと平行し、学外諸機関所蔵の宋元版仏典の資料・解題、および仏典の開版と伝播に関する従来の報告・研究等を各種目録によって検出し、必要なものについては購入し、入手し難いものについては複写等による収集を行った。

仮目録作成後、図書館において随時個々の仏典について書誌調査を行った。この調査においては、本学図書館より多大の協力をうけた。ことに神田博士寄贈本についてはその目録や善本書影の編纂のための作業に加わって閲覧調査することができた。これら一連の調査は対象が貴重書であるうえに虫損の激しいものもあり、ことのほか手間取るものであった。なお調査終了後、今後の研究に利用するためこれら仏典の一部のマイクロフィルム撮影を行った。

本学所蔵本の書誌調査をするうえであらわれた問題点を解決すべく、三月二、三日両日東京所在の諸機関への出張調査を行った。

三月二日　東京大学史料編纂所を訪問。近年対馬仁位東泉寺で発見された元版華厳経のマイクロフィルムを閲覧し、同経を学界に紹介された村井章介助教授の所見をうかがう。つづいて東洋文庫で、宋・嘉熙二年刊『仏果圜悟真覚禅師心要』、元・延祐三年刊『景徳伝灯録』を閲覧し、本学所蔵宋・嘉熙二年刊『圜悟心要』、元・至正二十五年刊『景徳伝灯録』と対照調査をする。

三月三日　大東急記念文庫にて、元・至正二十五年刊『景徳伝灯録』・鎌倉期刊覆元版『科註妙法蓮華経』を閲覧し、本学蔵同版本との対照調査をする。また、このほか宋版『大方広仏華厳経疏』、宋版大蔵経零本『成実論』等数点を閲覧調査した。この出張調査に際しては、さきに撮影した本学所蔵本のマイクロフィルムを持参し利用した。なお出張調査においても関係諸機関・諸氏のひとかたならぬ協力をいただいた。

この出張調査の成果の一つに、至正二十五年刊『景徳伝燈録』の大東急記念文庫本と本学所蔵本とを対照し得たことがあげられよう。この至正本は、『伝燈録』の開版・伝播史上における位置や、各巻末に記されている施財刊記から貴重な資料とされる。大東急本は、従来その『貴重書解題』で、闕葉・補写があるものの極めて摺刷よく、初印本であるとされ、各種の研究に利用されてきた。しかし、この大東急本においては、各巻末の施財刊記が摺刷されていない箇所があったり、刷られていても判読し難い箇所もあり、本学蔵本に比べると必ずしも良好とは言えず、本学蔵本の学術的価値を確認し得た。このことはまた、書誌調査をするうえで、いちいち原本にあたることの重要さをあらためて認識させるものであった。

以上が今年度の研究概要であるが、今年度書誌調査をおえた本学所蔵宋元版仏典は42タイトル72点となった。なお本学にはこれ以外に、宋版大蔵経として一括で多数の経典を蔵するが（第三目録Ｐ74～90)、本研究が一年計画であること等の理由により今回その調査はみあわせた。また宋元版に依って開版されたと思われる高麗版・朝鮮版・五山版等は宋元版仏典研究の重要な参考資料となり、今回その一部について書誌調査及びマイクロフィルム撮影を行ったが、詳しい調査については、上記宋版大蔵経の調査とともに今後の課題とする。

(研究補助員　梶浦晋　記)

＜個人研究＞

新美南吉資料研究
——「哈爾賓日日新聞」掲載作品について——

研究員
本学教授　斎藤寿始子
(児童文学)

『校定新美南吉全集』全12巻　別巻２（大日本図書1980～83）の編集に際して、その準備段階より初出誌紙の収集には、随分手を尽したが、編集段階に入っても杳として所在のわからないものが数点あった。表題の『哈爾賓日日新聞』もその一つである。国内では遂に見出せず、ようやく中国の児童文学者羅仙樵氏から情報をいただいたのは、編集作業の大詰に入った80年のことであった。しかも、中国は文化大革命後のことで、資料はどのような状態になっているか分らず、書庫のどこに在るかも知れないとのこと、ともかく、唯一、大連市図書館(旧・満鉄資料館）にのみ可能性があるとのことであった。

そして今回、浙江師範大学学長の蔣風先生のご尽力と、その門下で大連師範学校講師の滕毓旭氏のご協力により、大谷大学真宗総合研究所より恵まれた機会を得て、調査させていただくことができた。直接資料に触れて調査させていただいた日の感動は、終生忘れられないにちがいない。

大連市図書館に保存されている『哈爾賓日日新聞』は、３分冊に綴じられていた。排架号四七、1939（康徳６、昭和14）年４・５・６月分、同年10・11・12月分、1940年４・５・６月分である。他は無い。日付順に右綴じにされているが、数紙は失われ、切り抜かれたものもあった。閲覧を許された時間の関係で、調査内容は目的としたところに限定した。

『哈爾賓日日新聞』の概要は、校定全集第三巻の「最後の胡弓弾き」の解題（196頁）にある。しかし、解題が書かれた段階では、新聞の表記が「哈爾濱」か「哈爾賓」、「日々新聞」か「日日新聞」かに疑問があった。資料とした『満洲國現勢』は「濱」を用いていたが、南吉自身の遺したスクラップ・ブックに、わずか一ヶ所裁ち残された上欄外の横組表示「哈爾賓日日」とあったのでとりあえずこれを採用していた。今回、第一面の題字により、校定全集の表記に誤りのないことを確認できたのである。

題字の一例を康徳６年（昭和14、1939）11月20日から記しておく。第一面右上に縦組書き文字で「哈爾賓日日新聞」と記され、地模様は中程に東北名産のコーリャンを、下に哈爾濱の風物であるロシヤ風建築の屋根をデザインしたものが描かれている。なお、各紙面上欄には「哈爾賓日日新聞」の文字が付されていた。

同紙は、朝夕一二頁（朝四頁・夕八頁)、新聞定価一部金五銭、一ヶ月金一円十銭、郵税十五銭、広告料五号活字十五字詰一円廿銭、発行人寒河江堅吾、編輯人菅原理一、印刷人下村豊吉、哈爾賓埠頭區地段街貳號、発行所哈爾賓日日新聞社、電話代表庶務五四五六、販売部六四一二、廣告部三三七九、編輯局七三二〇　四七七九とある。新聞社名に「賓」の字が用いられているが、所在地には「濱」が用いられたことも判った。なお、同年４月には、発行所、編輯、印刷人ともに寒河江堅吾となっている。

南吉の同紙への寄稿は、東京時代の友人、江口榛一が学芸欄を担当することになり、1939年４月23日付で、南吉に原稿送れと便りを出したことに始まる。後に、江口は「哈爾賓(ハルビン)日日の頃」（大日本図書版童話全集付録№３）に、「とにかく、短篇小説をはじめ、詩・童話・俳句、その他なににかぎらず送ってきた原稿は、ほとんど間髪を入れず、割付をして工場におろした。」と書いている。そして、スクラップ・ブックの最初に貼ってある「詩　ねぎ畑、雨後即興」には、南吉の自筆で「一四、五、四」の書き入れがあり、最後は、1940年５月11日より開始の連載十回「家」完結の日となる。スクラップ・ブックには、朝夕の区別もなく、連載ごとの日付もなく、連続して貼り付けられているため、掲載状況が全く判らなかった。したがって、校定全集では裏面の記事内容等から６月中旬を完結と推定し、同時に、南吉の寄稿期間の最後と考えてきた。

今回の調査によって、開始は前述の通り1939年５月４日朝刊三面の「詩」からであることを確認できた。しかし、終了については、「家」の連載五回を掲載した1940年６月30日で綴りが終り、それ以降が失われているため確認をとることができなかった。しかし、連載の状況から推定すると、最終の十回は1940年６月５日㈮となる。そして、これが寄稿の最後の作品であったかどうか、スクラップ・ブックの失われた現在、判断の手段はない。

紙面の都合で、掲載を確認した作品名、掲載状況は他日発表させていただきたい。スクラップ・ブックの四枚の挿絵が、いずれも、今井一郎による「家」のものであったことだけ記して、この報告で『哈爾賓日日新聞』と南吉のスクラップ・ブックの概要と関係を明らかにしておきたいと思う。

『真宗学事研究』研究会報告
日時：1988年10月20日(木)
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

近代大谷派教団史に於ける占部観順異安心事件の位置について

海外仏教研究嘱託研究員　畑　辺　初　代

大きな講題を掲げていますが、今日お話し出来るのは、このテーマの回りを散策している私の目に入って来た事柄群を私なりの意味づけをして語らせてもらう程度です。現在の段階では到底、このテーマの全体を満足させうるようなお話は出来ません。その点をどうか御了承いただきたいと思います。

(一) 占部観順との出逢い

最初にこの占部観順異安心事件の中心人物の一人である占部観順に私が注目するに至った経過について少しお話しをしておきたいと思います。といいますのは観順との邂逅をふりかえりますとき私は観順と自分が何か見えざる糸で結ばれていたような気がしてならないのでして、その糸をたぐってみたいというのが私の研究の動機だからです。

私は三つの場で占部観順と関わりました。第一は、清沢満之伝や近代真宗教団史を読んでいた時です。大部分の清沢満之伝・真宗教団史には白河党事件が大きく取り上げられているのですが、その部分に、たいていは「このころ占部観順異安心事件があった。しかしこれについては差しおく」という形で表現されているのがこの占部観順異安心事件なのです。私は事件のこうした位置づけそのものに奇異な感じを受けたわけです。真宗大谷派は宗教々団ですから、一般的に考えれば、宗門の機構改革よりも信仰の在り様をめぐる論議の方が優先されるのが当然であるのに、何故こんな小さな位置しか与えられていないのだろうかという疑問を抱いたのです。この疑問は何に対する疑問かといいますと、明治30年当時の教団への疑問ではありません。敗戦後の教団史への疑問です。清沢満之伝を書かれた著者の立脚地への疑問です。

この疑問はその後、占部観順異安心事件の経過を調査してゆくにつれて大きくなっています。その理由は一つにはこの事件が、「しばらく差しおく」という形で捨て置かれていいほど小さなものではなく、本願寺派や真宗他派にまで何らかの対応を余儀なくさせるような質と規模をもっていたことが当時の新聞・雑誌を読んでいて知られて来たことによりますし、第二には、この事件が物語っているのは、宗門史の恥部であるということがはっきりしてきたということですし、そして第三に、清沢満之と占部観順は単に「このころ占部観順異安心事件があった」と言う表現で済ませうるような関係ではなかったということが知られて来たからであります。

いわば私は、法戦の事実の一端を知る機会を与えられたことによって、「占部観順異安心事件を欠落させたままの教団史・清沢満之伝というものは一体如何なるものなのか」と問い返す視座もまた与えられたわけであります。

私が占部観順と関わった第二の場は、『教行信証』に関する科文を蒐集整理する作業の中でした。私は三年ほどの時間を費して、『教行信証』に関する江戸期の講録を読みながら、そこの中にある科文をとり出し整理するという作業をしたことがあります。作業の全体を終わって私の中に、一つの大きな疑問と仮説が残りました。それは、「もしかしたら、江戸期大谷派教学というのは、一つであるという装いと、各個別々という両面性をもっていたのではないか」というものです。これは東西両派の科文の比較を通して、出て来たものです。大谷派の科文というものはきわめて狭く、3つの類型に大別できると私は思っています。一方、本願寺派の方は、科文をつくるということ自体を自覚的に拒否するような学派もあり、科文類型も多いのです。

また、本願寺派の方は一宗派一学派ではありません。しかし大谷派は、例えば円乗院門下とか香月院門下とかいう形で一応のくくられ方をしてはおりますが、学派という形をなさず、又何故、例えば公厳が香月院の門下といえるのかの証明も確かではなく、全体が一宗派一学派的装いをしているのです。さらに異安心調理という点についても、本願寺派では在野から本山教学を異安心として問題にしていったケースが多いのですが、大谷派はいつも本山から在野教学を異安心として取り締るケースばかりです。つまりいつも本山教学は正統教学でなければならなかったわけです。そこに大変な無理が当然あった

と思われます。だから深い所では一層バラバラではないかと想像したわけです。

その中で観順の『御本書拾穂録』を読んだのです。この著作は他の『教行信証』の講録とは異なる精神と形をもっているのです。香月院の系列にも円乗院の系列にも入れるわけにゆかないのです。私は当初は、その事が何を意味するかわかりませんでした。何故、普通の講録のように自分の読解力、あるいは師の言葉に乗って『教行信証』を解説するという形を彼がとらずに、問答形式にせねばならなかったのか。何故『六要鈔』・『御文』をはじめとして、一つの主題毎に恰も大谷派教学史を一望せんが如く、多くの講者の説を引き、それらを批判的摂取する形で思考を深めねばならなかったのか。その理由がわかりませんでした。たゞ前に述べた仮説はより強いものになりました。

今、私は『御本書拾穂録』の体裁が逆に観順の生涯と使命を見事に語っていると思っています。真に帰依すべき師と説が見い出せず、存覚・蓮如にまで溯らねばならなかった点に観順の生の意味・時代社会の要請が窺えると考えています。高倉学寮派の人々は各方面から「香月院一点ばり」という批判を蒙っていますが、彼らと比較すれば占部観順は、香月院だけでは、或いは直接の師である本法院義譲の説によりかかるだけでは到底満足できないほど、疑問多き人であったわけです。

第三の場は、昨年です。ふとした縁で『自督安心記』という名の聞法手帖を手に入れたのです。これを書いた人の本名はわかりませんが、芸名は市川市松といい三河を中心に興行していた芸人です。この聞法手帖には市川市松が同じ俳優仲間の石川幸吉（芸名市川団結）の書いた聞法手帖を借りて書写したものも含まれていたのです。本来なら、この手帖から読みとれて来るこの人々の信仰についても語りたいのですが、今回は時間も限られていますので出来ません。たゞいくつかの点だけ述べさせてもらいます。

まず、この石川幸吉も市川市松も観順の信徒の中心を占めていた人々ですが、この人達は当時河原乞食と賤称されていた人々です。この聞法手帖を見ますと、彼等の学識の高さ、信仰心の強さに驚くのですが、この人達を通して見えて来た占部観順の姿にも私は驚いたのです。

とりわけ石川幸吉と占部観順との強い紐帯を物語る具体例については枚挙にいとまがありません、例えば、観順の臨終間近の席に門信徒達がやってきて観順はその一人一人に遺言を贈っているのですが、石川幸吉の場合は、その暇乞いが終って廊下を去ろうとしている彼に、臨終間近で臥っている観順が声を励まして呼びとめ、「お浄土で又値うぞや」と言っています。信仰上の問答についても最も深い所まで教示している相手が幸吉なのです。そしてその幸吉が寺の法座でいろんな階層の人を前にして法義について語っているのです。

又ここに一通の借用証文があります。

明治32年5月24日付のもので、村松文七から唯法寺が四百円借用したという証文です。しかし、この借用証文の裏には明治40年11月付で観順が自筆朱書でびっしりとこの証文の由来を記しています。その内容を要約しますと、これは偽証文だというのです。自分が村松文七から借りたことにして石川金作と稲垣与市に渡したのだと。何故そんなことをしたかというと、同年5月に観順の社中相川信誠と禿林寿涛が議長となって山本喜代松宅で同行信徒集会を開き、法戦の費用を工面するために方策を話し合ったが見通しがつかないという事を聞いたので自蓄の金を借金したことにして渡したのであると。そして、その経過を書いた上で「後代の為に誌す」と結んでいるのです。

明治32年5月といえば、観順が擯斥処分をうける直前です。この間に唯法寺は寺の土地もずいぶん売却しています。石川幸吉や山本喜代松らも殆んど自分の財産を使いはたしてしまったのでしょう。そこで観順はこういう方法をとったのでありましょう。

この証文はとても面白いなあと私は思いました。観順は養子です。その彼が寺の土地を売ってその代金を提供し、しかもその偽証文の裏に朱書で経過を「後代のために誌す」と書いているのですから。偽証文も含めて法戦の全経過を後代に送り届けようとしているわけです。

こういう形で私は第三回目の出会いを通して、民衆と歴史という二つの視座から観順を見てみたいと思うに至りました。

とりわけ第三の邂逅のインパクトは大変強いものでありました。ですから私はここを中心としながら、第一・第二の邂逅の場で見えて来た観順の仕事の意味を考察してみたいと志しているわけです。いわば第三の場で見えて来た観順と信徒達の信仰共同体の全体像を時代社会像の中に出来るだけ正確に位置づける仕事を中心に置き、そういう共同体との関わりで清沢満之をはじめとする当時の教団人を描いてみたいというのが私の仕事にかける思いであります。

(二) 占部観順異安心事件の二つの時期と概要

今回は私の仕事の全体像の中で、第一の場を通して見えて来た側面を少し深める形での発表のみになります。異安心調理という場に限定して、そこの場で見えて来た信順派（占部観順・その社中及び門信徒）請求派註(1)（当時の高倉学寮・細川千巌・雲英晃曜・吉谷覚寿・広瀬守一など）との行動・言動を取り上げて、そこに見られる宗門観・門徒観・法主観・歴史観などの違いをできるだけ浮き彫りにしてみたいと思います。

まず、この事件の教学的側面での基礎となる論争の出発点は明治13年から14年にかけての占部観順と雲英晃曜との論争です。しかしそれが異安心調理事件としての形

をとって来るのは、明治30年5月12日に占部観順が清沢満之の懇請をうけて真宗大学初代学監として来京しますが、この日が起点となると私は考えています。

正式に法主現如から細川千巌（当時学寮講師）・吉谷覚寿（当時嗣講）に占部観順異安心調理の命令が下ったのは、7月6日ですが、私はその日を異安心事件の起点とは考えておりません。

その理由は二つあります。一つは、もし占部観順が石川内局と学生の総意をくんだ清沢満之の要請に応じて真宗大学々監の職に就任しなかったら、異安心調理事件は決しておこらなかったと考えるからです。

理由の第二は、7月6日の法主内命は、法主自身の安心領解上の判断に基づくものというよりむしろ、宗門内政治という点からの判断であることが、法主自身の言葉から窺いうるからです。

以上、二つの理由から私は5月12日を以って占部観順異安心事件の出発点と規定します。

さて、この5月12日から、7月6日の法主内命までにどういう事があったのかといいますと、高倉学寮の細川千巌達が全国の僧侶達に対して数回の一枚摺の配布をしております。これに対して観順の側は一度だけ一枚摺を配布しています。発行部数とか宛先などは残念ながら今の所わからないのですが、両派の一枚摺を比較してみるといくつかの違いが眼につくわけです。

まず、学寮派の人々のものですが、これは「諸国上京有志生」という代名詞で出されていること、観順を異安心であるという前提で出されていて、どこがどう異安心であるという表現が皆無です。一方観順側の方は「後藤海安」という個人の名で出され、観順の説、学寮の説を挙げて論証するという形をとっています。これを私は大変興味深く感じました。こういう両者の体質の違いは最後まで一貫しています。例えば7月6日の法主内命が下ってから、学寮が観順を呼び出していますが、その時も呼び出した責任者である細川千巌は自分の名前を出さないのです。だから観順が「高倉学寮からの呼び出しは細川講師からのものですか」などと質問しているのです。細川千巌にしてみれば自分が講師で一番上にいるのだから、高倉学寮と書けば即自分というつもりだったのかもしれませんが、観順の質問も当然です。何故なら彼は嗣講で、自分も学寮の一員なのですからね。組織と個人という問題に関する両派の相違がよく表現されている出来事だと私は思いました。

そして7月6日から7月29日までは、学寮派は三つの側面で行動してゆきます。一つは法主内命と辞職願を武器にして石川内局に異安心調理に協力するように働きかけをしてゆきます。二つめには観順との間で数回にわたって伝令を交換しつゝ、観順を安心調理の場に呼び出そうとします。三つめには、それらを遂一全国へ一枚摺にして伝えます。

一方観順の側は殆んど動いていません。安心調理上の手続きについて学寮派と伝令を交換しているだけです。

この伝令によって交換された文書には両派の法主観・安心調理観などの相違が出ているのですが、これについては後述します。こうして学寮派ははげしく動くわけですが、その動きが成功を奏したのが、7月21日で、この時細川千巌は法主に直訴を行ない法主からの下命という形で石川内局の同意をとりつけます。

一方、観順側はこの日を期に、病気を理由に在宅筆問筆答方式による安心調理を懇願します。註(2)

そして7月29日、観順は教学部より「嗣講休職ヲ命ズ」「真宗大学々監兼教授擔任ヲ解ク」「法義取調相済候迄講義説教差控ベキコト」という三通の辞令を受けとり、翌30日三河の自坊へ帰って来るのです。この時清沢満之は観順に同行して唯法寺にまで来るのですが、この時一体二人の間にどんな話がかわされたのでしょうか。こういう点については唯法寺に残っている満之の観順宛書簡も公開しながら別の機会に論述しようと思っています。

私は5月12日からこの7月29日までを一応「異安心調理事件第一期」と呼び、7月30日から明治32年7月25日までを「異安心調理事件第二期」と呼んでいます。この第一期と第二期を区切る基準は、①第一期では安心領解上の論議は全くされておらず、論争は専ら第二期になされていること、②第一期では宗門内政治の局面に殆んど出来事がおさまる形で生じてきているのに比して、第二期では宗門の枠を越えて出来事が生じて来ていることです。即ち大谷派僧侶だけではなく門信徒たち、他派の僧侶も第二期の舞台に登場して来るからです。

私はこの第二期の帰着点を明治32年7月25日としました。この日は観順が大谷派から擯斥処分を受けて追放された日です。この第二期の特徴の第一は、観順と学寮との間になされた三回に亘る筆問筆答を中心として、随所で文字言語による論争がなされていることであります。『教学報知』上でもなされていますし、本山からの使僧相手に信順派の信徒達が筆記者を立てて論争をいどみ、それを書物として印刷して配布しています。

『龍華空音 山本喜代松 安心問答筆記』をはじめとして『朝倉暁海と信徒四名との安心問答』、広瀬守一と神谷種十との安心問答がこれまでに私の蒐集したものですが、実際はもっと多くあったのではないかと『教学報知』の報道などから推測しています。三回の筆問筆答については少し述べますと、例えば『龍華空音 山本喜代松 安心問答筆記』を読んでみて、私が感じたのは、良い意味で江戸期安心調理の形を踏襲しているという事です。この問答は龍華空音が本山の命をうけて三河国額田郡東部（とうべ）へ説教に来た際、福岡町の山本喜代松が質問をし、議論が繁雑にならぬよう、龍華方三名、山本方二名の筆記者を立て四日間の問答を行なって、その筆記に双方が調印して作成されたものです。この書物は谷大図書館にもあります。私が読んだ限

りでは龍華空音はだんだん所説がずれて来ています。そしてずれて来ているということがわからないのです。空音も大変だったろうなと思いました。何故なら、山本喜代松にとっては信は生きるものであり、自己の心臓のように感じられているものですから、ずれない。逆に小さなずれの中に世界の違いを見抜いてしまうのです。一方、空音にとって信はそういう位置にない。語るものです。だからずれていても気づかない。聖教の言葉の解釈ばかりしているのです。

こういう講者方の心根を適切に表現していると思われるのが、広瀬守一の「信ずる内にしたがふ義もこいもとむる義もよろこぶ義も含んでいるからこまかしきことは聞かずともよい」という言葉です。何故、こんな細かい事を必死になって聞いて来るのか、それを最後まで講者方はわからなかったのかもしれないと私には思われるのです。

こういう態度は高倉学寮の講者方だけに見られるものではありません。観順の社中もどんどん戦列から落伍してゆきます。六百名の弟子のうち最後まで残るのはたった一名です。『教学報知』をみてもはじめは宗義のことの方が大切だと言う論調の方が多くを占めておりますが、やがて「内地雑居」「国家的大事」の時を目前にひかえて、いつまでも細かいことばかり言っていても仕方がないという論調に変わっていきます。

いわば観順や信徒達は、時代社会の大勢からは、時代錯誤的な偏執者達として映ったのです。そうかもしれません。

たゞちょっと弁護のために言っておきますが、彼らは論議をもちかけはしましたが、学寮派の講者方のように数にたよったり、礼儀をふみはずすような事はしていないのです。

例えば空音と四日間にわたって論議をした山本喜代松は最後に「貴僧ノ御示シノ御仰セハヨク相ヒ分リ候ヘドモ、私ノ領解ニハ合ハザルガユヘニ己来ハ御尋子ヲ致セバ激論ニ渡ルユヘ是ヲ終局ト致シタシ」と言って問答を閉じているのです。

論戦に現時点で数量的に勝つとは最初から観順も信徒達も考えていなかったのです。負けるとわかっていた。それでも論戦を行なったのです。そこに彼らの生命がある。だから活字にして残したのです。活字の中・歴史の中に自分の生命を投げ出したと私には思えてなりません。勝つのが目的ではなく論議を深めること、争点を明瞭にすること、そして正否については歴史にゆだねてゆく――そんな精神を感ずるのです。

そういう論議が随所でおこるのが第二期の特徴ですが、結果的には、観順と学寮との三回の筆問筆答は深まらないまゝ、観順は7月25日に擯斥処分となります。

この間の学寮側の動きについて言いますと、彼等はずいぶん困惑しています。その理由は、観順の社中六百名と門信徒一万八千名の署名・たび重なる上京懇願などによって、観順との筆問筆答を行なわねばならなくなったからであり、加えて中心人物であった細川千厳が急死してしまうからです。

雑誌『仏教』でも境野黄洋が、

> 請求信順、其正邪は暫時御預り申して、宗学上の議論には大谷派の正義派（学寮側を指す――畑辺註）が到底敗北だ。香月院の一本槍にて笑評破塵問対を書きて手錬の程此に顕はる。最早敵に城内を見すかされたり。何處に往て軍師孔明を傭ふべしだ。

と書いていますが、宗門の外からはこのような眼で見られるし、一方、本願寺派や他派においても「大谷派本山は邪義に堕ちた」という批判が高まり、原口針水、東陽円月などが次々と批判文書を出版するなどで、大変狼唄します。

ですから学寮派は四回も「もうこれで論議を終らせてほしい」と法主に上申し、そのたびに「学者だったら最後まで論議しなさい」と叱られているのです。しかし、最後には、法主を動かして、論議を打ち切りにし、形ばかりの示喩書と、請書（うけしょ）の偽造という形で観順を排斥してしまいます。

そして、擯斥処分になった観順を、興正派が、「占部観順の安心について尋ね調べた結果、当派に於いては異義とは認められないので、当派に引きとりたい」と大谷派に申し出て引きとり、勧学にするのです。まあこういう形で興正派や、興正派と深いつながりにある本願寺派は自分たちの安心領解が大谷派と同一ではないと表現したわけです。

これが占部観順異安心事件の大筋です。具体的事実関係については、年表の方に書き記しておりますので、それを参照して下さい。註(3)

全体を通して、この事件は他の異安心事件とは違う二つの特徴をもっています。その一つは、大谷派異安心史上唯一の異安心者からの要請による文字言語上の論争であること、二つには、大谷派教団の内部事件にとゞまらず、本願寺派や興正派も巻き込んだ事件であったこと、この二つであります。

㈢ 占部観順異安心事件の教団史上に於ける位置について

こうしてこの事件を概観してみますと、この事件は異なる体質の衝突という様相をもっていたことが了解して頂けたのではないかと思います。この体質の相違を端的に表現しているのが小栗栖香頂と観順の往復書簡です。小栗栖香頂は観順への手紙の中で、日本・アジア・宗門の危機を訴え、「汝すべからく反省せよ」と五回も反省を迫っています。汝には愛山護法の精神がないのかと。国家の危機・宗門の危機の折りに一体宗門を二分するような事をするとは何事ぞというわけです。これに対して、

観順は「愛山の心は貴殿と同じなれど、宗義のことは多くの衆生の迷う事ゆえ、疎略にはできませぬ」と前置きして、何故、請求説が問題であるのかを詳述しているのです。彼は、宗義のためには愛山はどうでもいいなどとはいいません。又、反対に愛山即護法とも言わないのです。私はここの所、とても面白いと思いました。宗義のためには愛山はどうでもいいという考えと、愛山即護法という考えは一見全く逆のように見えますが、かえって近いのではないでしょうか。見方によっては両方共、山と自分を同一視している所から出て来る言葉にも見えます。だから「愛山の心はあるけれども、宗義のことは多くの衆生の迷う事ゆえ」という観順の言葉は山の中に衆生を見ている所から出て来ているように思えたのです。こういう精神が愛山即護法という立場からは狭い偏執であり、愛山の敵として切り捨てられてゆくのです。

だから私はこの事件に限定していえば真宗大谷派は真(まこと)の公を喪失したのではないかと推測しているのです。宗義の場に衆生が見えなくなったからです。ですからそれ以後、教団の中での貫練会の公認・教学上の統制の強化が進行してゆくのも当然の成行きのように見えます。清沢満之を始めとする所謂東京派、精神界の人々がこういう動きとどう関係し、彼らの視座にどれだけ衆生が入っていたかは別に検証されねばならないとは思いますが……。

何故、私がこういう事を表現するかといいますと、実は石川舜台にしろ、和田円什にしろ、その著作を読みますと信順説なんです。

だからこの事件は、単なる学説上の対立なんかではないのです。はっきり言えば、石川舜台などは学説としては信順説に立ちながらも、結局は政治的利益から請求説の側に立つのです。多くの方がそうしたわけです。占部観順は、政治的に作られた異安心者なのです。

御承知のように真宗大谷派は江戸末期から明治30年代にかけて多くの異安心者を出しています。頓成・是海などはその代表的なものです。私は頓成や是海の説をあながちに正しいと思っているわけではありません。観順の説にしてもまだ多くの疑問と異論を持っています。たゞ、その奥にもう一つの疑問をもっているのです。それは、真宗の信心とはそういう意味で正しいとか正しくないとか言えるものであろうかという疑問です。語られてはいるが生きられていない正しい信心と、生きられている正しくないとされている信心とがあるのではないかという疑問です。そして私はこの両極の全く異質なものを何らかの形で表現してゆきたいと思っているのです。そうでなければ教団には過去が返ってこない。恐しいことです。

頓成・是海・観順という三名の著名な異安心者達は、民衆の力をバックにしながら、教学上の重要な問題提起をした人々ですが、教団は逆に、例えば頓成事件の後、円乗院の説は依用してはならぬといって、統制を強化してゆくのです。過去の伝統を切り捨ててゆくのです。頓成の問題提起をうける事によって、円乗院の説を批判的摂取して継承する道には立たないのです。観順と問答した際にも、初期香月院一点張りで、それが高倉学寮を一貫する純一伝統であるかのように装うのです。初期香月院だけをかつぎ出すことによって、学寮の雑多性、豊醸さを封じ込めてしまったのです。だから自分の理論が奥行きをもたない。占部観順異安心事件のあとも金子大栄異安心事件などがありますが、論議はされていません。そういう意味では、論議をもつ異安心事件の最後にこの占部観順異安心事件はあたります。

しかし、これまで述べて来ましたように、この事件に於ける論議は、要求されていやいや行なったものであり、又、途中で三回も打ち切り申請をしている事実からして、論議自体を公にして教団内の信心の深まりを促すような動機は学寮の側にはなかったことが知られると思います。ですから、私はこゝで高倉学寮は死んだのであると考えているわけであります。高倉学寮の二百二十年に亘る伝統は、伝統を最も強調する人々によって葬り去られたのであると考えているわけです。

しかし一方、占部観順異安心事件は、占部観順というもう一つの世界を持つが故に、別の意味を持っています。所謂近代教学を批判的に摂取する場に於いて、省りみられねばならない事柄を多く提供してくれていると思うのです。そもそも近代教学という言葉で、清沢満之や曽我量深を一括することの危うさをはじめとして、伝統を批判的に摂取することの重さ・厳しさ・価値を教えてくれているように思います。

観順の学説自体について言えば、所行・法蔵菩薩・三願転入などの点に於いて曽我量深の功績の萌芽を見ることが出来ると思いますが、これについては、江戸教学史の流れの中で彼の所説を位置づける作業を具体的に進めつゝ発表してゆくつもりでいます。

ともあれ、高倉学寮の死滅の時に、恵空にまでさかのぼりつゝ、伝統を確かめ、それを批判的に摂取し、信順という言葉に凝縮して語り、宗我を越える世界を安(やす)々と生きた一人の老師が存在したということは、誇ってもいい私達の伝統であろうと思うのです。

今回、出来れば三回の筆問筆答についてもお話ししたかったのですが、時間が来てしまいましたのでこゝで終らせてもらいます。何分にも教団史・教学史上完全な闇になっている事柄でして、加えて私は、事件そのものを一括してとらえるという立場を拒否し、一枚の手紙、一冊の本に触れつゝ、その波及していく世界を把えてみるという方法しかとれませんので、ずいぶんわかりにくかったかもしれません。どうか御了承下さい。御拝聴ありがとうございました。

註(1)　信順説と請求説については別に一稿をしたため

ようと思っているが、始めに明らかにしておかねばならないのは、この説が何処の場を問題にしているかということである。信順したらいいか、請求したらいいかという場、即ち人間の行為の場でこの説の是非が問題になっているわけではない。往生浄土の真の原因は何かという意味場に於いて問題になって来るのである。信順説では、人間が請求的存在であることは前提とされており、人間の請求心が挫折し、転ぜられた所に信順を立てるのである。だからそこには請求という不満足心はなく、信順の相はそのまゝ願生安楽国の心となると説かれる。信順説を唱えた観順が請求説を批判するのは、人間が請求的存在であるという側面ではなく、「信順した相が、阿弥陀如来にむかって我を助けて下され、救って下されという思いの形をとる」という側面である。この点を理解しないと、この信順説と請求説の論争は些細な事のように見えて来るのである。

尚、私としてはこの両説の対立は、単にこの点のみならず阿弥陀観・浄土穢土観にも波及する大きな問題を提起していると考えていることを附記しておきたい。

註(2) 私はこの観順の行為選択の仕方にとても興味をもった。学寮の取調記録や後の観順の語りからするとやっぱりこゝは逃げていると見える。だから当時の『教学報知』を読んでみると、この点について評価は二分して来る。「逃げたのは卑怯だ」という意見と、「安心調理にふさわしくないやり方を学寮派がとったのだから出席しないのは賢明だ」という意見に二分して現われて来ている。当然だと思われる。

観順は事実、病気であったから診断書を出し、病気を理由にそのような選択をしたわけである。病気に関していえば学寮派はその診断書を疑って二人の人間に自分達が選んだ医師を随行させて観順の病状を調査に行くのであるが、その医師が学寮に出した診断書は、先に観順が提出した診断書よりさらにひどく、まるで観順の身体は病気のデパートみたいに書かれていることからも、観順が病気であったことが証明されている。

しかし、病気ということが真の理由ではない。何故なら彼はこの期間中も真宗大学の教檀に立っているし、又、病気というならいつも彼は病気といえるほどだったからである。さらに言えば病気が理由になること自体が観順と相応しないのである。例えば臨終直前の法要でも「もうじき死ぬから今回の説教は全部自分がやる」と堂々と宣言するような人間なのですから。

以前の私なら、こういう観順の姿勢を見たらやっぱり、「逃げたのは卑怯だ」で終わっていたと思う。だから一層興味を持ったのである。今は、「こういう智恵もあるのだなあ」と思っているのである。

ある閉鎖社会の中で、自分が生産的な形で関わりうる位置を失なったと自覚した時、人間にとっては両極の選択が迫られる。生産的に生きることを放棄するか、それともその閉鎖社会を支えているもう一つ下のというか、もう少し広いというか、そういう土俵に降りるかである。後者の選択をした時、当然、今まで自分がいた閉鎖社会の地位を放棄する覚悟をしなければならない。『自督安心記』の中で、この選択をした直後の観順と石川幸吉の対話が出ていて、私はこの時点での観順の行為がすでに後者の世界に立っていた観順のきわめて自然な選択結果であったことを知ったのである。

註(3) 拙稿「占部観順異安心調理事件」(『大谷大学大学院研究紀要』第五号、昭和63年12月、大谷大学大学院発行。)参照。

研究所彙報

新プロジェクトはじまる

本年度より新しい指定研究として「大学開放と生涯教育の研究」が始まった。目下研究員による熱心な討議とともに、嘱託研究員による広汎な資料収集によって、研究の才一歩が進められつつある。

研究補助金交付決定

才14回（平成元年度）日本私学振興財団の学術研究振興資金は、150件の応募の中から、84件の研究に対して、総額２億５千万円が交付されたが、本研究所では、昨年に引き続き、「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」に対して、240万円の交付が決定された。贈呈式は６月23日に東京のアルカディア市ヶ谷で行われ、安富主事が出席した。

刊　行　物

- さきに『研究所紀要』才６号が発行されたが、その中に掲載されたツルティム・ケサン先生のチベット語訳『歎異抄』が『朝日新聞』３月23日の夕刊（東京版３月30日）に写真入りで紹介された。
- 真宗学事研究班より『上首寮日記』Ⅲが６月30日に発行された。ご希望の方は、研究所までお申し込み下さい。頒価は、￥3,200。

客員研究員

- 1983年10月１日より本研究所の客員研究員として、またその後1986年10月より西蔵文献研究班の研究補助員として活動されていたアレクサンダー・ノートン氏が米国に帰国された。帰国後は、母校のウィスコンシン大学で博士論文の作製に従事する。ご健勝を念じます。
- 1986年10月１日より本研究所の客員研究員として、唯識の研究に従事していたウィリアム・ワルドロン氏が米国に帰国された。帰国後は、母校のウィスコンシン大学で博士論文の完成に向けて取りかかる。ご健闘を期待します。
- ミシガン大学教授で、本研究所の客員研究員であるルイス・ゴメス博士が昨年に引き続き、６月15日より当研究所にて、『浄土三部経』の翻訳のために研究に従事されている。８月下旬まで滞在される。

工　　事

この９月より本学では、校舎増築のための工事が始まるが、研究所の正面にも工事の影響が及ぶため、しばらく研究所の入口が北側に変更になる。来所の方々には、色々とご迷惑をおかけすることになりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

研究所行事

本年１月以降の研究会は次のとおりである。

真宗学事研究　研究会

７月14日（金）「近代の親鸞像
—『教行信証』書誌をめぐって—」
研 究 員　名畑　崇教授

海外仏教研究　研究会・学術懇談会

１月18日（木）「ジャイニ先生を囲んで」
P. Jaini 博士
(Univ. of California, Berkeley 教授)

２月28日（火）「チベットのことばについて」
チベット学者　N. Narkyid 氏

６月８日（木）「いくつかの大学を訪問して
—アメリカの仏教学について—」
研 究 員　安富信哉助教授

７月４日（火）「Dharma-dharmata-vibhaga
について」
レスリー・河村博士
(Univ. of Calgary 教授)

７月18日（火）「アメリカにおける仏教事情
—禅・真宗・キリスト教—」
阿部正雄博士
(Pacific School of Religion 客員教授
・奈良教育大学名誉教授)

研　究　所　報　第 22 号
1989年7月20日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒 603　京都市北区小山上総町